

表 4-4A 「事例研究用フエイスシート」の具体例

事例提供者：松本結実（所属：ホームヘルプサービスセンター） 検討日：平成11年9月3日

氏名 (年齢)				住所	区
Yさん (男・47)				大阪市	〇〇区
ヘルパー派遣の主な理由					
平成7年9月頃よりリウマチが悪化し歩行困難になり、生活支援が必要となった。					
派遣開始		平成10年1月22日		福祉事務所	
氏名 (単身)	続柄	年齢	備考		
家族構成					
(22歳時自認)					
経済状況					
① 年金 (厚生年金約15万円/月)	② 一戸建て ()				
② 所得 ()	③ 集合住宅 (賃貸文化住宅) ()				
③ 生活保護 ()	④ 高齢者用住宅 ()				
④ 仕送り ()	⑤ その他 ()				
⑤ その他 ()	a. 持ち家 b. 賃貸 S25年から住居				
心身の状況					
① 身体障害者手帳 (1種4級)					
② 療育手帳 ()					
③ 精神障害者保健福祉手帳 ()					
(主な疾患)					
○リウマチ					
昭和52年頃より発症					
平成3年頃からさらに悪化					
(現在の治療状況)					
○医師の診察 (1/週)					
かかりつけ医 ()・無 ()					
特記事項					
尿失禁が頻回にみられる。					
生活歴					
大工であった父親は仕事中の事故のため、本人が幼少時に亡くなり経済的に苦しい家庭に育った。母親は常に病気がちで入退院を繰り返していたため、本人は15歳の頃から縫製工場で働いてきた。長女であったこともあり、きょうだいの生活から母親の看病までを担っていた。25歳の時に職場結婚をするが、長男出産後32歳の時に離婚。母親も離婚前に死去。その後、現在の地で長男を一人で育てる。しかし、その長男が22歳の時に自殺。その後、一人暮らしとなる。					

表 4-4B 「事例研究用フエイスシート」の具体例

家族・親類	本人との関係 (支援者なし)	備考 (年齢・健康状態・職業等)	支援内容	
支援体制	サービス名	担当機関	援助内容/援助開始時期/頻度等	
	ホームヘルプサービス	ホームヘルプサービスセンター	週3回。1回2時間。掃除、洗濯、買い物。	
	ショートステイ	特別養護老人ホーム	半年前に1週間利用。	
	デイサービス	老人福祉センター	週1回。昼食、入浴、レクリエーション。	
	訪問指導	保健所		
	訪問看護	訪問看護ステーション		
	食事サービス	社会福祉協議会	週3回。弁当配食。	
	日常生活用具	福祉事務所	ベッド。	
	ボランティア	社会福祉協議会	主に話し相手	
	地域	支援者	支援内容	支援者
民生委員	見守り活動。行政との連携。			
隣人	見守り活動。			
あさ	ひる	よる	備考	不定期
ヘルパー				
火	訪問看護		昼食 (食事サービス)	訪問指導 (保健所)
水	デイサービス			福祉事務所
木	ヘルパー			民生委員
金	ヘルパー			ボランティア
土			昼食 (食事サービス)	隣人
日				
検討課題				
1. 頻回な尿失禁への対応 2. 生活意欲をいかに引き出すか				

表 4-9 「経過記録」の具体例

日時[担当者]	本人の状況・変化	援助者の働きかけ	分析・考察・所感
10月16日(金) 9:30~11:30 [浦林]	訪問すると、横になってテレビを見ている。かなり尿臭がきつい。ヘルパーからのあいさつに対して返事はするものの視線を合致さない。 ヘルパーからの声かけに対して、「別に…」 「特にないです」といった発言がある。 相変わらず、パンツを履かずに掛け布団をかけている。敷き布団は尿でベトベトに濡れている。 パンツのことについてのヘルパーからの働きかけに対して、「これいいんです。便所どうせ脱ぐんやし」との返答。布団を干すことは拒否。	「ご気分はどうですか」「何かしてほしいことはありますか」と声をかける。 「このままでは冷えるので、布団を干して、パンツを履かれたらどうですか」と声をかける。 その場ではパンツを履くことを強要せず、枕元に新しいVパンツを置いておく。	生活への意欲が感じられない。興味があつてテレビを見ている感じでもない。 これ以上、ここで促しても無意味と判断。ただ本人が履く気になればいつでも履けるように考えた。 パンツのことは、何かの無意識のメッセージかもしれない。そうだとすると、その内容はまだ読みとれない。

1月4日(月) 9:30~11:30 [浦林]	今年初めての訪問。ノックをすると本人の大きな返事。ドアを開けると、即座に「おめでとーさん。待ってよ」と笑顔を見せる。尿臭はするが、パンツは履いている。こたつの上には、3分の1ほど減ったカップ酒が置いてある。お正月ということで隣人がお節料理少しと一緒にくれたらしい。 掃除とお昼の支度を終えると、本人から「なあ、浦林さん。あなたに息子の写真を見せたかろう」と切り出される。その後、約40分ほど亡くなった息子さんについて話す。その内容は幼少期の楽しかった思い出がほとんどであった。最後は、少し涙ぐむ。	ひたすら聞き役に徹する。時折、その時の気持ちを言語化できるような問いかけをした。 お酒のせいもあっただろうが、初めて私にみせた臍舌ぶりであった。パンツを履いていたことや息子さんの話などから少し内面の変化があるようにも受け取れた。 本人が過去を整理していく作業のひとつであつたように思う。ご自分から話されるタイミングを待つことが大切であると感じた。
-------------------------------	---	---